

たわしの読書メモ・・・ブログ 736 [廣松ノートⅡ— (4)]

・廣松渉『東欧激変と社会主義』実践社 1994

廣松さんの運動論・革命論の「三部作」の三冊目です。二冊目に書いたように一冊目で流れを押さえ、対話の主題的なことは、この読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言に書いています。実はこの本は新訂増補版で、旧版は戦旗社(荒派)から出されていて、それに一冊目の読書メモ 734 の『現代革命論の模索』の「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況」「第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース」の再掲として編集を加え「補・プロレタリア権力への道」として再掲載（こちらの方が編集されてまとめられているのですが、『現代革命論の模索』の時代区分に属するので、そちら方で読書メモを残しています）と熊野純彦「廣松渉 私記」を付けて、再発行されたものです。わたしが最初に読んだのは戦旗社版で、新訂増補版の熊野さんの文もこの本の版で以前に読んでいます。付録の「補・プロレタリア権力への道」は 1960 年代の文ですが、他は 1990 年代の初頭の廣松さんの亡くなる年 1994 年までの最晩年の文です。まさに「マルクス・レーニン主義」的なところで貫いているのではととらえています。

これは、講演録やインタビューで、ソ連邦の崩壊過程で、そもそもマルクスの思想の原基的なテーゼからとらえ返す作業として語っていて、更めて、押さえ直す作業をしています。わたしも、この間、マルクスの読み直しをしているので、その点も押さえる作業として、この本を読み、読書メモを残します。

もうひとつ、このメモをとっているときに、二〇二六衆議院選挙がありました。廣松さんのその時代がこの時代と同じようなことを繰り返しているのだとの、思いを強くしたものです。まあ、資本主義の原理は同じことを繰り返さざるをえないのですが、それを断ち切るにはどうすればいいのか、あらためて考えていた次第です。

まずは、目次から。

目 次

『東欧激変と社会主義』発刊にあたって

I 東欧激変と社会主義の行方

- 一、二十世紀末つげる世界史的構造変動
- 二、スターリンによるロシア革命の歪曲
- 三、三〇年代の危機と資本主義の“変貌”
- 四、帝国主義包囲下でのソ連経済の歪み
- 五、いまこそマルクス主義の旗のもとに

II 社会観の哲学

- 一、近代市民社会における「自由」
- 二、資本による労働者支配の実相
- 三、マルクスによる近代社会批判

- 四、マルクス主義は生産力主義ではない
- 五、ソ連型の国家社会主義の矛盾と顛末
- 六、現代社会における特殊的矛盾を觀て

III 人類史的危機止揚の展望

- 一、ソ連新左翼の動向とエリツィン
- 二、二心同体のノーメンクラトゥーラ
- 三、アメリカの加速度的没落と日本
- 四、PKO反対と日本新左翼の課題

IV 五五体制の終焉と革命派の新課題

- 一、55年体制成立時点の構図
- 二、理念的拮抗対立の空洞化
- 三、政官財癒着の腐朽的構造
- 四、隆替劇の永続革命的促進
- 五、共産主義根本理念の宣揚

V 現代社会における選挙戦の意義

- 一、永続革命の一環として——マルクスの時代
- 二、革命政権の大衆的認証——ロシア革命の教訓
- 三、日本資本主義の変動——選挙戦の今日的意義
- 四、“住民の代表”を議会へ——革新系議員の責務

補・プロレタリア権力への道

- 一、旧左翼の革命路線
 - 1、社会民主主義
 - 2、コミンテルン
 - 3、構改・ソ連派
 - 4、中共派
- 二、新左翼の政治路線
 - 5、革命路線劃定の諸前提
 - 6、日本革命の展相の予料
 - 7、新左翼の任務と課題

廣松渉 私記 熊野純彦

- 一 夢みられたふるさと
- 二 まぼろしの九州人民共和国
- 三 夜と霧の時代のなかで
- 四 あかつきの鐘をならすもの

さて、切り抜きメモです。前の二つのメモと同じように備忘録的に簡単に書き遺します。

対話というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「Ⅰ 東欧激変と社会主義の行方」・・・これは講演録です

「二、スターリンによるロシア革命の歪曲」

「スターリン主義の社会体制はそもそも一種の資本主義にすぎなかったという見解もありました。・・・・・・」 24P・・・一応「国家資本主義」という言い方が定説的になっているようです。

「ご承知の通り、マルクス本人は社会主義という歴史段階は立てておりません。／マルクスは、資本主義社会のあとに、プロレタリアートの革命的独裁の過渡期があって、共産主義社会になると考えました。ただし、その共産主義社会を低次の段階と高次の段階との二段階に分けて考えております。／レーニンは、マルクスのいう低次段階の共産主義社会を社会主義社会と呼ぶことで固有・高次の共産主義社会から区別したわけですが、その社会主義社会の実現でさえかなりの将来のことと考えていたようであります。・・・・・・」

24-5P

「ところが、ヨーロッパ革命が挫折し、レーニンが死んだ後の、一九二四年末に、スターリンはソ連一国での社会主義の建設が可能だと主張し始めました。・・・・・・」 26P

「四、帝国主義包囲下でのソ連経済の歪み」

「戦後世界が旧植民地体制を再編したことも、植民地解放闘争のエネルギーや米ソのパワーポリテクスの屈折といった諸要因が絡んでのことではありますけれど、資本主義がフィスカル・ポリシーなどによって先進国での国内市場を内包的に拡充できる体制に再編したことの関連で捉えねばなりません。」 35P

「Ⅱ 社会観の哲学」・・・これも講演録

「一、近代市民社会における「自由」

「ところが、この賃労働—資本関係ということの実態—を考えると、形式上は自由で対等な関係であっても、内実においては服属の関係になっている。マルクスとか社会主義者とよりもはるか前にルソーなんかよりも前に、例えばニコラス・ランゲなんていうひとがいて、近代社会というのはある意味からいうと、過去よりも一番ひどい、一種の奴隷制社会なんだということをいちやく指摘しております。」 47P・・・「賃金奴隷制」

「三、マルクスによる近代社会批判」

「さらに、マルクスは計画経済ということも、言葉としてもどこでも言っていない。・・・・・・」 56P

「・・・・・・しかしエンゲルスにしても、あるいはエンゲルスに指導を受けていた第二インターナショナルのカウツキーとかベルンシュタインというような人達も、マルクスが既成の社会主義に対して批判的であったことを承知しており、自分たちの立場を社会民主主義と自己規定しました。」 57P

「・・・・・・マルクス本人は社会主義という言い方に対して一種の反発をもっていた、自分は絶対に社会主義を名乗らないという、かなり強い考えがあったように思われます。」

58P

「マルクスとしてはそういう一種のアゾツィールテゲゼルシャフト、共同組合化された社会、『共産党宣言』の用語でいうと、アソツィアツィオン、一種の共同組合的社会を考えていた。」・・・・・・62P

「四、マルクス主義は生産力主義ではない」

「生産力第一主義という批判を聞いたら、マルクスやエンゲルスは、ヒックリして我が耳を疑うことでしょう。」・・・・・・」64P

「・・・・・・分業が固定化されてしまうと、それが一種の階級的な構造になってしまうこと、あるいは悪い意味での官僚主義的なシステムになってしまうということです。原理的にいくらかでも流動的であるということになれば、総体的にはフィックス (*fix* 固定) されているにせよ、草野球のチームのように、人格的には対等・平等な社会になると思います。」65P

「マルクスは実は生産力の定義をどこでもやっていません。次のようなファクターによって決まるだろうという言い方はしている。労働対象の在り方、それから労働手段、例えば機械であるとか道具であるとかの在り方、さらには生産の技能、それにまた労働の強度、インテンジテートです。」67-8P

「マルクスには生産力という概念と、生産関係という概念と、それから生産様式という概念がありますが、これをインチキな弁証法的概念体系に仕上げたのがスターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』です。生産力というのは一口で概念化してしまうと人間と自然との関係、それから生産関係というのは清算における人間同士の関係、そしてこの両方を包摂するのが生産様式という概念だというわけです。つまりスターリンの場合には、生産力と生産関係と生産様式というのが、何か弁証法の三概念ということで整理されている。そういう形で生産力と生産関係をふりわけているんですが、私の読む限りマルクスの生産関係という概念と生産力という概念は、見る角度は違うんだけど、事柄としては同じことを見ているわけです。」・・・・・・」69P

「・・・・・・マルクスは、人間の本質も社会関係の総体であるという言い方をしていますし、社会というのも人間の諸関係だと言うように、関係ということを非常に強調する。そういう発想からしますと、生産力、生産関係というのが別々にあるんじゃなくて、一つの対自然ならびに人間関係のダイナミックな関係が成立していて、その在り方が歴史的に発展していく。」70P

「・・・・・・マルクスにおいても社会観の哲学は人間観の哲学と相即するものになっている所以です。」71P

「五、ソ連型の国家社会主義の矛盾と顛末」

「・・・・・・レーニンの死後、スターリンは、ロシア一国での社会主義建設が可能であるという考えを打ち出し、反対派を次々と追い落として、一九二八年にはついに一国「社会主義」の建設を強行し始めました。が、それは本質的に無理な企図であって、変畸せる

「社会主義」国家体制、一種の「国家社会主義」(シュターツゾツィアリスムス)をもたらす結果になりました。」 74P

「私は、テクノクラート(狭義の技術官僚だけでなく経営や行政の官僚をも含めます)とパルティクラート(党官僚)がそのまま対立するようになっているとは思いません。ノーメンクラトゥーラは、たしかに、パルティクラートとテクノクラートから成ってはおりますが、いわば両方の“魂”をもっていて矛盾に悩んでいるというのが実情でしょう。もちろんテクノクラートの魂で突っ走ろうとしているいわゆる“改革派”と、パルティクラートの魂で突っ張ろうとしている“保守派”との両極が存在しますが、そのような連中をもふくめて“二つの魂”で動揺しているものがノーメンクラトゥーラの大部分ではないでしょうか。」 80P

「六、現代社会における特殊的矛盾を観て」

「・・・・・・労働力の再生産に必要な分以上という意味での「剰余労働」生産物の配分を、労働者たちがいわば協同経営者として決定するのではなく、「剰余労働分」をすっかり吸い上げられてしまう構造になっている場合には、実質的には資本主義的賃金奴隷と同じになってまいります。その吸い上げが、富国強兵のための軍需に当てられるだとしても、また、拡大再生産のためのファンドに当てられるだとしても、その元資になる「剰余労働」生産物をどう配分するか(消費分にどれだけ当てるか)の決定権が労働者にはない場合には、よしんばノーメンクラトゥーラが経済学的にみて一切寄食(収奪)していないとしてさえ、労働者は事実上“賃金奴隷”であり、その経済体制は一種の賃金奴隷制だということになります。」 83・4P

「ところで、現代社会というものを各国的に観る域を超えて、世界システムの相で視るとき、また別の視角から種々の問題が孕まれております。いわゆる南北問題が最たるものだと思います。そうしてもう一つ、各国的にも世界的にも、エコロジカルな危機という問題が目にとまります。」 84P・・・・この後世界の矛盾的現況を展開しています

「Ⅲ 人類史的危機止揚の展望」・・・・党派「戦旗」の機関紙へのインタビュー投稿文です

「二、二心同体のノーメンクラトゥーラ」

「★『モスクワ人民戦線』の訳者の佐久間邦夫さんが、パルティクラート(党官僚)という概念とテクノクラート(技術官僚といっても工業的な分野の官僚だけでなく、行政官僚も含めたものですが)という概念と区別して使っておられますね。私も、この二つの面の内部矛盾ということを考えます。／もちろん、パルティクラートと区別してテクノクラートといったとしても、テクノクラート自身党员であり、しかもかなりの幹部ですから、二つの実体の対立というより、同一の主体が二つの魂をもって揺れ動くといった方がいい。「一心同体」とでもいうのかな。」 96・7P

「三、アメリカの加速度的没落と日本」

「ところがそのアブソーバー(吸収材)としてのアメリカの役割が、いよいよ限界になって

きた。ということになると、日本の対米直接輸出およびアジアN I E Sを通じた迂回輸出、それによる対米黒字の累積という構造も、うまくいかなくなる。」 101-2P

「IV 五五体制の終焉と革命派の新課題」・・・講演録です

「一、55年体制成立時点の構図」

「・・・・・・・・五五体制の成立の経緯を理解するうえでは、今日の眼からはナンセンスであろうとも、マルクスの謂うフォルクスフォアウアタイル、すなわち、人々のあいだでの先入見的ドグマを無視できないのです・・・・・・・・」 114P

「二、理念的拮抗対立の空洞化」

「・・・・・・・・次期選挙を睨(「にら」のルビ)みつつどのような合従連衡(「がっしょうれんこう」のルビ)については政党の再編を進めるか端倪(「たんげい」のルビ)すべからざるところがあるということであります。」 123P

「三、政官財癒着の腐朽的構造」

「代議制民主主義というものは、選挙民の側が有能な人物にお願いして代議員になって頂くという建前であり、この構図が充(「み」のルビ)たされてはじめて代議制民主主義の名に値します。しかるに、候補者の側が「票を買う」ようでは民主制が聞いてあきれます。／直接間接に金銭で買うのではなく、利益誘導を約束して選挙民を釣るのであっても、やはり同断であります。或いはまた、選挙が一種の人気投票に類するものになっている場合にも、「衆愚政治」に陥りかねません。／現代資本主義国家における選挙の実態は如何でしょうか？ブルジョア民主制が自己破綻に瀕しているように私には思えます。」 130P

「四、隆替劇の永続革命的促進」

「さて、今後の政治情勢は波瀾含みでもあり楽観しすぎてはなりませんまいが、一時的な曲折はあっても、趨勢としては、五五体制下に比べれば中道寄りの政権の機関を経て、更にはより“穏健左派”寄りの政権へというベクトルで暫くのあいだ進む公算があります。こりベクトルを、マルクスが説いた意味での「永続革命的」にどう左方に伸長して行くかが課題になります・・・・・・・・」 137P・・・これは外れています。廣松さんは、ポスト・グローバル化の時代の、右派ポピュリズムの台頭やファシズムの隆起をとらえ損なっています。ここからが正念場です。

「五、共産主義根本理念宣揚」

「・・・・・・・・ソ連社会が何であったのか、それは建前としては“マルクス・レーニン主義”を奉じていても、実態においてはおよそマルクスの理念に背馳(「はいち」のルビ)するものにすぎなかったこと、そして、その社会がこうこうしかじかの歴史的経緯で自己崩壊に至ったのであること、このことの説明まで必要とします・・・・・・・・」 144P・・・そもそもレーニン主義の止揚が必要

「・・・・・・・・これらの課題については、それぞれの分野におけるいわゆる専門的研究者たちをも動因し、彼らの蓄積を組織的に汲み上げ、その成果を体系的に整備して更なる深化・具体化・展開を期すことが可能ですし、そのための機会と機構を率先して設定するこ

とが活動家に望まれます。そのための準備的条件は、例えば『フォーラム 90 s』などの形において既に存在しますので、その活用が図られてよいのではないかと思います。・・・・・・」 148P

「革命的暴力論、これがまた重要な鍵になりましょう。プロレタリア独裁の革命的権力が過渡期には必須だというのが我々マルクス派の基本的了解事項の一つであります、広汎な大衆を思想的・組織的に獲得するうえで、これが大きなネックになっているという現実があります。・・・・・・これが共産主義社会建設の方策論(市場や貨幣を過渡的にどう扱うのか、計画経済のありかた、などの議論と絡めて)とも関連づけて提示さるべき課題であることは附言を要しないであります。」 149-50P・・・・革命のファクターは函数的連関態の変数的にとらえられること。プロ独の問題は、専制政治の暴力的支配の中で、「武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁」から「共産主義的第一段階への移行」として立てられていたこと。普通選挙権が一応機能しているところで、武装蜂起革命論はありえるのでしょうか？ 右派の反革命クーデターにどう対処するかで、暴力性が必要になるときもありうるとしても、これには、韓国における大統領の軍事クーデターへの国会議員と民衆との連繋で阻止しうることも参考になるし、そして民衆のもっと大規模なデモストレーションで阻止することも考えられる。問題は、プロ独はマルクス派は別の問題を対象化できてこなかったというところで、そして歴史的事実として、プロレタリア単独で権力を掌握などにはできないということ、マルクス／エンゲルスも、『ゴータ綱領批判』で草案にある他の階級・階層を敵対視する路線を批判していた事実もあります。また、マルクス派の差別を対象化している論客は、マルチチュードやサヴァルタン概念で、革命の主体に「他の」被差別者を含めることを理論化しています。そもそも、「後進国」の民衆という被差別者総体を切り捨てた、「先進国革命論」でしかないのです。「共産主義者には国境はない」というテーゼに反してもいるのです。

「V 現代社会における選挙戦の意義」・・・・講演録

「・・・・・・俗に普通選挙権と言われるものが実現したのは、一九世紀も終りに近くになってのことです。／婦人参政権、すなわち女性にも選挙権を与える形での普通選挙制度が実現を見たのはいつのことであつたか、歴史の知識を思い出してください。一番先進的と言われたイギリスにおいてさえ、第一次世界大戦以後、一九一八年でしょう。アメリカは更に二年遅れて、一九二〇年です。ということは、ロシア革命のとき、ボルシェヴィキ政権が一九一七年の十一月に実施した憲法制定議会の選挙が、歴史上初めての、婦人参政権を含む普通選挙であつた、ということになります。」 155-6P

「一、永続革命の一環として——マルクスの時代」

「ラッサール派の場合には、人々に理解させ、政府に圧力をかけて、一定の国家主義的(シュターツプツィアリスティッシ)な政策を採らせようという考えでしたから、彼らが選挙に参加したのは判ります。しかし、マルクスの場合、反動政府に対するそういう幻想とは無縁でありますから、ラッサール流の思惑で選挙に臨んだわけではありません。／マルク

スが一八五〇年に選挙への積極的参加を構想したのは、彼の永続革命論の戦略戦術に基づいてのことでした。……」 160-1P

「マルクス・エンゲルスは、このことをもちろん承知しておりました。ですから、ドイツやオーストリアで平和革命が可能などとは考えませんでした。しかし、マルクスは、イギリスやアメリカやベルギーといった議会制民主主義の定着している国では、議会を通じてプロレタリア政権が成立した場合、反動派の叛乱が起こることなく、プロレタリア独裁政権を維持できる可能性がある、と予想した次第なのです。」 163P

「二、革命政権の大衆的認証——ロシア革命の教訓」

「先にも申しました通り、マルクスは当時の左翼陣営では例外的に議会選挙に独自候補を立ててコミットする方針を打ち出しました。そして彼の晩年から今世紀の初めにかけて、マルクス派の党組織が議会選挙で進出したことが一契機となって、ヨーロッパ各国の左翼運動において、マルクス派が主流派の位置を占めるようになりました。理論的に優れているという要因も勿論ありはしますが、片々たる少数派にすぎなかったマルクス派が、プルードン派、バクーニン派、ブランキ派、それにアナルコ・サンディカリスツなど、往時の大勢力を追い押して主流派の位置を固めるに至ったのは、議会選挙に消極的だった他派を尻目に、議会選挙に積極的に取組んだことを抜きには語れません。」 164-5P

「三、日本資本主義の変動——選挙戦の今日的意義」

「日本に焦点を置いて申します。戦後日本の経済は、一口で言えば、対米貿易の黒字で資源を調達するという構図の中で、高度成長や安定成長を遂げてきました。しかも或る時期からは、対米貿易の大幅な黒字を資本輸出することで、今では世界の債権国に成り上がっております。貿易黒字も、昨今では対ECの黒字も大きく、対アジアNIESの黒字も大きくなりました。ところで、アジアNIESはこれまで対米貿易で黒字を上げているわけですが、これら諸国は日本から輸入し、それを用いて製品化したものをアメリカに輸出しては稼ぐ構造になっている。日本から見れば、これも間接的な対米輸出と言うこともできます。この間接輸出の分も入れますと、日本の総輸出額の五割以上になり、利益でみますと、貿易黒字の八割にもなります。」 171-2P・・・失われた三〇年で、この構造は瓦解しています。

「それだけに、資本主義体制派の側には、収奪はしても自らは捲き込まれないようアメリカなどと結んで旧体制を維持しようとする部分、背に腹はかえられない限りで余儀なくコミットする部分、こういった分立を生じるでありましょう。また、自称社会主義派の内部にも、共産主義に対してどういうスタンスを取るか、分化・再編が不可避になることでしょう。」 177P

「四、“住民の代表”を議会へ——革新系議員の責務」

「……議員の積極的活動と言っても、一昔前にあったような、いわゆるドブ板議員の受請い・代行という形では済みません。生活協同組合運動とか、環境破壊反対運動とか、こういった形態だけだとは限りませんが、地元住民の運動に支えられてはじめて実効

性をもちえます。事と次第では住民の自発的運動をオーガナイズすることも必要であり、・・・・・・・・」 181P